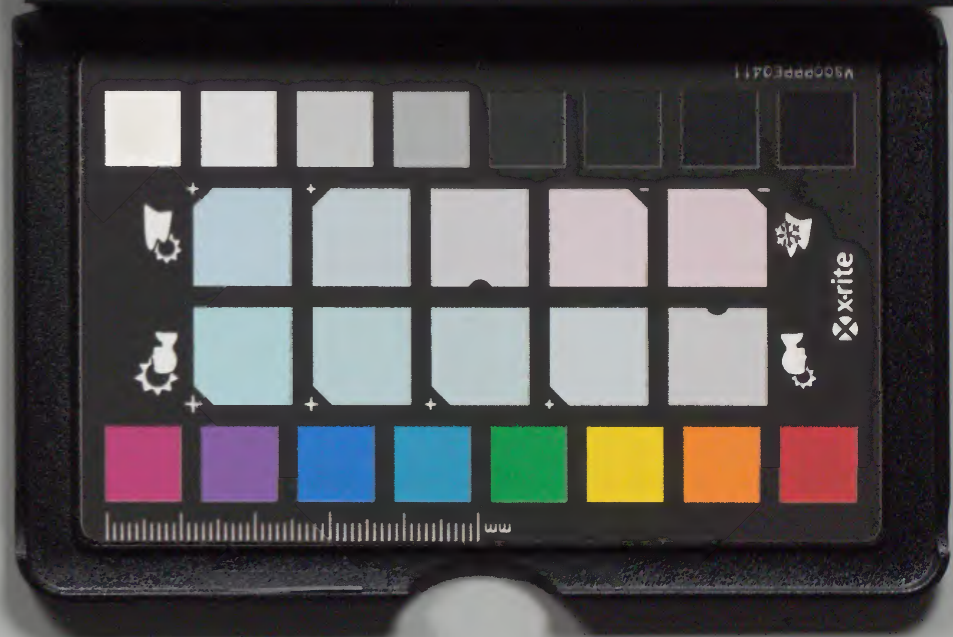
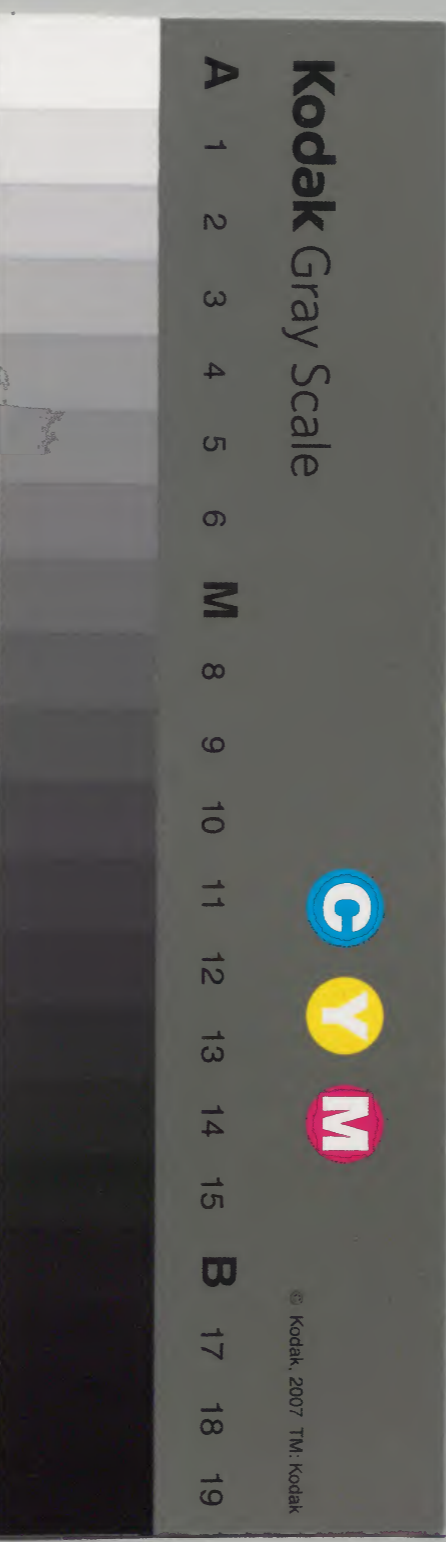


五十二

和	書	門	類
四	八	七	八
一	七	〇	〇
九	三	〇	〇
冊	架	函	號

內	閣	文	庫
和	書	類	類
四	八	七	八
一	七	〇	〇
九	三	〇	〇
冊	架	函	號

內閣文庫	
番號	和 48780
冊數	93 (52)
函號	149 112



武德編年集成卷之五十二

木村高敦撰

慶長十一 丙午年

正月大

○元日 神君一 台德公御對顔歳且ヲ祝シ玉

ノ諸士叅賀其例式異ナリ無シ

○五日 五帝太元長福九正五位下ニ叙セラレ

右兵衛督義利常陸介頼宣卜称シ玉ヲ義利後ニ

公義直ト改

○十九日 江城經學ノ事ヲ池田右衛門督利隆

後改武藏其弟藤松利繼後任左衛門督福嶋左衛門大夫正
則加藤肥後守清正加藤左馬助嘉明黒田筑前守
長政細川内記忠利京極若狭守忠高同丹後守高
知浅野但馬守長晟松平土佐守一豊右馬玄蕃頭
豊氏鍋嶋信濃守勝茂森右近大夫忠政寺澤志摩
守廣高命セラレ今日洛陽三十三間堂ノ椽
ニ於テ諸候ノ陪臣強弓ノ誉アリ輩通矢ヲ射ル
尾陽候忠吉君ノ從士朝岡平兵衛五十一本射通
又足堂前天下一ノ監觴ナリ渠ハ石堂竹林坊如
成カ高弟ト云
○六日筑後ノ國主田中兵部少輔吉政カ嫡男

生膳十時二近來乱心之家臣五十三人ヲ手刃シ
今日兒扈從ヲ誅スルトテ却テ裁セラレ
○六日台徳公ノ執事青山播磨守忠成初祿
常陸
ト内藤修理亮清成ノ神君ノ御鷹場ニ於テ鳥網
ヲ張置処ニ神君野外御放鷹ノ序ニ上覽アリ
テ其實ヲ亂ナレ御怒リ不斜工ハ台徳公兩臣
ヲ勅發セテ凡
○頃日奥平大膳大夫家昌カ江府ノ宅庭上ニ
生首アリ且居城宇都宮ノ郭内ニ在リニ旗竿ノ
上ニ塔鳩卯ヲ十二是ヲ生ム羽翼既ニ成翱翔ス

彦坂小刑部直通支配所ノ里民ノ訴テル旨アリ直通仕置非法ニ次シ且貢税ノ私曲アリ工ハ其子兩人ト共ニ禁錮セラル

二月大

○八日 江府櫻田仙臺少將政宗カ宅ハ神若渡御長光カ其外數品且在京ノ刻馬留料トシテ江州蒲生野洲兩郡ノ内一石万ヲ賜リ其子若狭守忠宗ニ大原真守ノカヲ授ケテ此後往々諸候ノ宅ハ渡御アリト云々

○十日 江城經營手傳ノ諸候武江ニ群參シ陪臣ヲ豆州ニ遣シ石ヲ運送セシム惣船數三十艘

但シ一艘ノ中ニ百人持ノ石ニツテ入ル其價白銀二十

枚粟石價殊ニ高直一坪ノ分黄關東ノ諸候ハ去年台徳公ノ御上洛供奉ヲ勤ル工ハ此課役免

許セラレ其餘ノ列々ヲ廿ル輩ハ高千石ニ人夫一人宛ヲ課ラレ

○十九日 台徳公伊達政宗亭ハ渡御淺野彈

正少弼長政加藤左馬助嘉明伴食タリ

○廿五日 那須資宗左京大夫從五位下ニ任叙

又修理大夫資
不暗カ子ナリ

○是月野州宇都宮山上ニ旗雲顯ハル

○三月小

○朔日江城經始本城ハ矩繩元ノ如シ二三ノ

九ハ藤堂和泉守高虎繩張ヲ以テ郭内ヲ廣クシ

石垣高十十間十二三間惣石垣ノ分七百餘間ト

云々佐久間河内守正實是ヲ奉行ス

○三日神君上洛トメ今日御出乘ノ旨兼テ相

寃ル処甚雨工ハ延滞セラル且越前黄門ノ嫡男

長吉丸台徳公ノ御前ニテ元服御諱字ヲ授

子ラレ冬河守忠直ト稱シ且右近衛權少將從四

位下ニ任叙セラレ元和三丁巳年參議ニ任叙セ

左遷アリシ

一伯殿是也

○四日冰降テ且雷鳴スト云々

○十日神君江城ヲ發途シ玉ヲ御旅泊ノ次

第神奈川藤沢小田原ニ嶋清水ト云々

○六日駿府ニ著御當城主内藤豊前守信成

ヲ来歳城替アラシメ神君御退隱ノ城郭々々

シムハキ由ニテ四ヶ日爰ニ御滞座城ノ内外ヲ

巡視シ玉ヲ

○廿五日 田中ノ城ニ至ラセ玉フ

○廿六日 中泉ノ旅營ニ着 御是ヨリ西方八

ノ如

○是月 御當家ノ功臣阿倍四郎兵衛忠政カ子

善大夫重真ハ父忠政御家ヲ立退ク刻蒲生氏郷

ニ属シテ九戸修理政實カ居城ヲ攻ル時重真火

箭ヲ郭内ニ射込セニ弓術明達ノ譽ヲ顯ハシ其

後蒲生家臣數百人黨ヲ立テ會津ヲ立退ク時重

真是ヲ逐テ其長ヲ射殺ス固ヨリ勇烈ト云第一

御當家ノ世臣ニテ有リ以テ禄ヲ授ケ昵近ニ列

セラシ後四郎兵衛ト改タム重真カ弟正之モ

台徳公ノ書院番士ト成ルト云 後稱四郎五

○今春 榊原七郎右衛門清政ヲ館林ヨリ

テ駿州久能ノ城ヲ守ラシメ三千石ヲ賜フ是人

三郎信康君ヲ輔佐シケルカ彼ノ生害アリシ時

ヨリ禄ヲ奪テ其弟式部大輔康政カ家ニ墜居ス

彼城ハ去慶長六年ニ以テ未大久保弥三郎忠政累

代忠勤アルヲ以テ輕率ヲ禰ケ守ラシメラ

○四月大 御ニ玉フ

○七日 神君伏見ノ城ニ着 御ニ玉フ

○十一日 江城天守ノ經營伊達政宗訴望メ其

二重目ヲ經始ス一キニ次ニ彼縹圖ヲ政宗カ臣

梅村出羽ニ渡升凡

○九四日 赤井刑部少輔幸家卒ス其子藤右衛門幸長ハ往

年信州上田ニ於テ忠死ス

○九八日 神君御入洛齋内ヲ遂テレ即日伏

見ノ城ハ赴カセ玉ヒ御滯雷ト云

○九九日 武經七書開板功成テ今日ヨリ世ニ

行ハル伏見石垣一萬石以下是ヲ築ク萬石以上

ハ駿府ノ城搆ヲ沙汰スル故ナリ

○洛陽万年山相國寺ニテ山門建立ス是備前金

吾黃門秀秋没後米穀二萬石倉庫ニ在テ池田輝

政去年以來是ヲ借用シ今度 公命ヲ受テ彼寺

ニ寄進スルヲ以テ山門ヲ造營スト云

五月小

○朔日 駿州久能ノ警衛榊原七郎右衛門清政

享年六十一歳ニメ卒ス是内記清久後改カ又十

リ後ニ清久ヲ久能山ノ守衛トセテ

○廿日 烈風甚雨江府呂川ノ沖ニ於テ城築ノ

夕メ運送スル石舩若干破レ海底ニ沉ム就中加

藤左馬助舩四十六艘黒田筑前守舩三十艘鍋嶋

信濃守舟二十艘ト云々

○六日御當家干城ノ三傑其一負上州館林ハ

城主柳式部大輔源康政疔腫ヲ患フ

○台德公尊慮ヲ悩ニナレ酒井右兵衛大夫忠世土井大炊頭

利勝ヲ館林ニ遣ハナレ良醫今大路玄朔同玄鑑

ヲ以テ療養ヲ加ヘシメ玉フ康政其腫物大切ニ

メ死ニ臨ニテヲ察シ家中ノ政勢陳法ノ書ヲ其

子遠江守康勝ニ譲リ意氣祥々トメ平日ニ替ル

ト無シト云々

○十四日己ノ刻館林ニ於テ柳原康政享年五

十九歳ニメ卒ス法諱ヲ見向ト謚ス其臣南甚之

ハ殉死ス台德公阿部備中守正次ヲ館林ニ遣

ナレ喪ヲ訊玉フ今年ノ刻神君ノ妾西郷ノ方

卒去蓮葉院日淨ト号ス今川義元ノ臣叁州西郷

ノ城主鶴殿長助長持カ孫ニメ藤太郎長照カ娘

ナリ此腹ニ池田輝政ノ室良照院殿出生アリ

○十六日越後國主從四位下行侍從兼左衛門

督藤原秀治享年三十一歳ニメ卒ス其子久太郎

僅カ十一歳ト云々

ト云フ是ナリ

○頃日 伏見松ノ丸加番松平若狭守正吉好色ノ罪ニ依テ領知ヲ没収セラルル是ハ伏見ノ城ニテ庚子ニ戦死スル大給ノ支流五左衛門近正カ次男ナリ

○四日 駿府ノ城築営来月朔日事始メタルハキニ次スル処来正月ニテ延引ノ由ニ命アリ

○十日 江城ノ經營組々ヲ分ラレ大畧造畢又福嶋正則カ組合ハ残ル取テク其切ヲ遂ルニ依テ休暇ヲ賜ハリ武江ヲ発ス末切ヲ終ナル輩モ

下吏人夫ヲ残シテ其身ハ帰國スヘシト云々然レトモ一万石ニ百人持ノ巨石ニツ宛ノ積リ獻スヘキ旨ニ命アリ時ニ加藤清正諸将ヲ勸メ彼大石百二百五十三宛ヲ各獻ニ畢ニ又頗ル御喜悦ト云々今度經營ノ間ニ福嶋左衛門大夫家ヲ出奔セシ奴婢池田輝政家ニ仕ヘ他行スル折柄福嶋カ僕従是ヲ見咎メ直ニ門内ニ附込テ輝政ノ厨ノ前ニメ捕ワレ処ニ池田家ノ雜卒出向ニ狼藉者ナリト正則カ奴婢ヲ搦捕左衛門大夫是ヲ聞テ江城普請中斷諱ヲ禁セラレ然モ事

ヲ起ス方一族ノ罪也。此ハキ捷タリ吾奴隷
如是ノ違犯ノ科勿論ナリ。トテ彼女ト氏ニ呼寄
死刑也。トテ輝政カ奴隷必罪ス。ハ力ヲ付ル者中
送ル正則短慮理不盡ノ氣象タリ。此今般徳便ノ
所存ノ由世ニ感ス。田代ノ事ハ此ノ外ナシ。トテ
○九日 福嶋正則武江ヨリ帰國トシテ今日伏
見ニ着ス。正則暴虐ニメ領國安藝ノ嚴嶋ハ先年
毛利元就寄附セシ神領ニ千石ヲ没倒シケルカ
嫡男刑部大輔正之カ濫行モ彼神罰ナリトテ今
年僅カ五十人持杖ヲ寄附シテ且鳥居一ヶ所ヲ

造立セシムルト云ハトモ當祭祀ノ日ニ代官山
本小兵衛狂乱ノ死亡其外怪異打續クエハ安藝
備後ノ兩國甚々恐怖ノ思ヒヲ懷クト云
○十四日 津田長門守信成領二萬石織田左門頼長
有樂ノ次子稻葉甲斐守通廣兵庫頭重通カニ男天野周防守雄
光寺澤半左衛門岡田平六等洛外愛宕山ニ詣シ
飯路ノ刻彫物師後藤長兼カ妻加茂辺ヲ道遠シ
是モ飯活ニ赴ク処右ノ輩放逸ニ彼女ノ藥ノ戸
ヲ開キ狼藉ニ及シトス。千時長兼カ伯父後藤光
兼極老ニテ隨逐セシカ答メテ曰此藥ノ中ハ後

藤長兼カ妻ナリ皆々其容只ヲ見覺ハタリ歷々

ニハ似合ナリノ旨罵リケレハ各赤面メ退クト

云々

七月大

○八日尾陽忠吉君ノ電臣小笠原監物忠重カ

吹挙ヲ以テ抱ラレシ給人ヲ改易セラル忠重大

ニ忠吉君ヲ恨ニテ禄ヲ奪テ出奔ス是人ハ和泉

守貞朝カ孫和泉守吉次カ子ナリ男色ヲ以テ電

幸セラレ恩遇厚カリシト云々

○十三日内藤仁兵衛忠政享年七十五歳ニメ

卒ス

○廿七日神君伏見ヨリ御出京二條ノ城ニ御

在留ト云々

○是月仙洞御所御造營越前黃門秀康郷是ヲ

沙汰セラル

○江州坂田郡長濱ノ舊城ヲ修築シテ内藤豊前

守信成ヲ来歳駿府ヨリ爰ニ移ナレトテ城

築ノ事近江美濃ノ大石并飛騨ノ國主金森法印

ニ命セラル長濱ハ越路ヨリ難波ハノ要路々

ルニ信成ヲ以テ守ラシメ北越ノ列候大坂秀

頼ノ臣ハ密策ヲ通スハキ致ト御延慮ヲ廻行ナ
ル工ハト云々

○後藤長兼當復洛ノ賀茂ニ於テ寄合ノ族力不
法ヲ訴テ神君其輩出テ申披クハキ旨ト命テ
ル所ニ各陳謝スハキ術ヲ失テ於是津田長門守
信成天野周防守雄光稻葉甲斐守通廣寺澤半左
衛門岡田平六領知ヲ没収セテ織田左門頼長
ハ右樂カ家督ニ立ハカラナリ大嶋雲八
阿部右京矢部善七郎野間猪之友浮田才壽モ連
坐ニテ改易ニ及ナリ
天野ハ其子佐左衛門雄得
御書院番ヲ勤仕ニケレハ

其家断絶ニ及ハス周防守
ハ慶長十四己酉齏居ス

○菅沼志摩守定仍カ家督トメ勢州長嶋ノ城地
ヲ當時 台徳公近臣左近定芳ニ賜テ是ハ定仍
カ末弟ナリ定仍カ弟主膳定成ハ終ニ東武ニ至
テナレ工ハ其弟左近カ兄ノ遺跡ヲ継コトヲ定
成憤リ遁世シケル處江州坂本ニテ無幾程齏死
ス

○太田安房守資武入道武庵カ子新六郎重政カ
嫡男宋女資宗七歳ニメ 神君ヲ拜謁ス後備中
守ト称ス是ナリ竈妻於勝ノ方
猶子ト云々

八月小

○十一日 神君御参 内右兵衛督義直君常陸
从頼宣君從四位下ニ叙之左近衛権少将ニ任セ
ラル

○十六日 春日社修理料トメ米二万俵ヲ一采
院門主ニ寄附シ玉フ

○廿七日 二條ノ館ヨリ伏見ノ城ニ還御ト
云ク

○當春ヨリ洛ノ大高角倉貞順玄之号素庵ト其
能筆十リ
子與一郎玄徳号巖水巧ヲ能スル工一丹波ヨリ

山城世喜ノ邑嵯峨ニ至リ船ヲ通スヘキ爲ニ川
ヲ堰シメラルル處今月成就シ近境大ニ利潤ヲ得
ルト云ク玄之カ父ハ吉田與七郎光由入道了以
ト称シ之代相續才智アリテ交易ノ事ニ精シク
甚々富祐ヲ得ルト云ク

○西尾隱岐守吉次享年七十七歳ニメ卒ス兼テ
酒井河内守重忠カ三男主水忠永ヲ嗣子トス其
後實子出生セシカハ別々御家人ニ列セラレ藤

兵衛利氏ト称シ千九百石ヲ賜フ

○四國中國大風吹テ田園損毛ス

○四國九月大風如...

○朔日 嶋津少将忠恒松平御称号御諱字

賜リ家久ト改ム後年權中納言ニ昇進ス

○七日 冬州成道山大樹寺御當家祖考ノ

廟所ナルニ勅願所ニ准セラル暹譽上人

綸旨ヲ賜フ

○并 冬河國大樹寺勅願所ニ准セラル宗弘通

玄門祈 宝祐ノ疆ニ丹精者 綸旨如新

仍執達如件

安永十一年九月七日 院中辨友系

○九一日 神君坂東御下向ト又伏見ヲ發達

至ト伏見ニハ秀康郷暫御在城ト云

○保田家傳ニ曰 神君今度水口ノ旅營ニ於

テ保田甚兵衛則宗ヲ御家人ニ列セラル舊領

三千石ヲ賜フ

○九三日 江城本丸經營造畢ニ 台徳公御移

徙ト云 御連枝鶴千代君干時四歳後一常州河

内郡下妻五万石ヲ授ケラル藤堂和泉守高虎今

般江城修築ノ矩繩ヲ沙汰スル勞ヲ賞ニ備中ノ

内二万石加ハ賜フ

山一十月小

○朔日神君白須賀ノ旅堂ニ御滞坐是霖雨工
八十月和州葛下郡新庄ノ領主桑山修理亮重晴
入道治部卿法印宗榮卒去不十行年八
○六日駿府ニ着御當城ヲ河野辺ノ地ニ移
シ築カルハキ旨御沙汰アリト云

十一月大

○四日神君江府ニ還着シ玉ヲ
○六日勢州桑名城下大火ト云ニ青山播摩守
忠成内藤修理亮清成嚮ニ神君遊獵ノ場ニ於

テ細ヲ張り鳥ヲ得ルノニ非ス陳謝ノ詞モ禮
ヲ失フエハ台徳公御勳氣アリ此上尚其科重
カルハキ旨本多佐渡守正信神君ハ歎訴シ阿
茶局等ノ侍女種々ニ神君ハ歎キシカハ遂ニ
御許容アリテ台徳公ハ彼二人カ罪免除シ玉
フハキ旨釣命アリ台徳公御喜悦不斜ノ兩
人カ科ヲ宥メラレ勤仕ス然レ氏元ノ如ク日々
ニ昵近スル下ハ聽シ玉ハ不頃日評議ヲ疑ナレ
駿府ノ城ヲ河野辺ノ地ニ移ナル下ヲ止ラレ當
時ノ城郭ヲ南北ハ廣ク築キ出スハキ旨ニ決ス

○十一日 台徳公ノ御前ニ於テ越後國主堀久、
太帝首服ヲ加テ從四位下侍從ニ任叙シ松平ノ
御称号御諱字ヲ賜リ松平越後守忠俊ト称ス是
ハ堀左衛門督秀政カ孫ニメ左衛門督秀治カ子
十リ
○十五日 安房ノ國主里見梅鶴九 台徳公ノ
御前ニ於テ首服ヲ加テ從四位下ニ叙シ安房守
ニ任シ且ツ御諱字ヲ賜リ忠義ト称ス
○廿一日 神君川越ノ邑ニ狩シ玉ヲ淺野彈正
少弼長政隱居料トメ常州真壁五万石并江州愛

知郡内五万石ヲ賜フ

○廿八日 堀太郎左衛門秀重享年七十五歳ニ

卒ス是ハ奇藤道三入道カ臣堀掃部助秀澄カ

子ニテ豊臣太閤ニ仕フト云々

十二月小

○二日 神君ノ密旨ニ依テ 台徳公古河下妻

依竹筋巡視ニ玉フハキ為ニ放鷹ト称セリ今

日江城御出藥ト云々 里見安房守忠義侍從ニ任

又

○廿三日 仙臺政宗カ息女上総守忠輝主ト婚

礼アリ勝臣トシテ瀬上丹波鈴木茂右衛門坂将
監等薬ニ相従フ是么ハ慶長三戊戌年ヨリ約セ

ラハ所ナリ

○是月細川忠興ノ宗子内記忠利侍従ニ任ス

酒井與七郎忠勝従五位下備後守ニ任叙ス後讀

岐守是ナリ駿豆ノ代官井出甚ハ正次従五位下

志摩守ニ任叙ス

○是年永樂錢通用ヲ止メ薄錢ヲ用テ此

○豊臣大谷ノ大政所洛東高臺寺ヲ建テ此福嶋

加藤人夫ヲ出シ合ハス

○對州ノ宗義智使節ヲ以テ言上メ曰先達テ

釣命ヲ蒙テ朝鮮國王和ヲ整フヘクハ信使

来聘スヘシト相達スル処是ヲ兼服シ大明ヨリ

遣シ置守護ノ兵ヲ返シ信使ヲ渡海セシメ既ニ

着岸スト云々神君欣然トメ對州ノ使ニハ御

刀ヲ授ケラレ雞林ノ信使ニ米穀千石ヲ鎮西ニ

テ與ヘラル

○松平周防守康重カ長臣岡田大和元次カ子内

記元勝御家人ニ列セラル彼大和始ハ竹右衛門

ト称シ驍士タル工ハ慶長六年己一万石ヲ封シ

伏見ノ城衛ヲ命セラルル處尚康重カ家ニ永ク
仕ヘシト欲シ固辞シケルヲ甚ク御祿歎アリ
テ今度内記ヲ阿茶局カ子神尾丑兵衛守世カ第
ト称シ召出サレ後備前守ニ任スル是ナリ

○長崎奉行小笠原一庵卒ス其跡役長谷川左兵
衛藤廣ニ命シ賜フ

○久保丑郎勝周ニ二百石ヲ賜フ是人ノ大猷公
ノ時分ノ御所附トシテ和泉守ニ任ス

○安藤治右衛門正次ヲ假ニ經營ノ奉行トセラ
ル

○柳生但馬守宗巖卒ス二男又右衛門宗規祿ヲ
襲テ新陰ノ刀術道統ヲ相續ス後任但馬守是ナ
リ

○林又三郎信勝武陽ニ下向シ台徳公ニ拜謁
ヲ遂テ永ク駿府ニ勤仕ス一キ御旨ヲ蒙リ

其師妙壽院惺窩先生ニ賤別ノ爲ニ一旦飯京ス
時ニ先生延平答問一卷ヲ信勝ニ授ク是厚キ恩

慮アリト云々信勝ハ羅山子道春是也

○寂初彦坂小刑部直通カ掌ル豆州銀山當時大
久保石見守長安揆断シ土土銀ト等分ニ出テ殆

ト佐州ノ銀山ニ均ニ河合作兵衛ニ徒同心五十
人ヲ附属セラレ彼山ヲ守ラシメ玉フ是ハ天正
十年年甲陽ノ士井伊直政ニ附属セラレ其
内十リシカ年ヲ歷テ家臣ニ推スルヲ怒リ彼家
ヲ去テ流落セシヲ頃年五百石ヲ賜ハリ昵近ス
ト云
○大河内又ニ昂正勝率ス是ハ冬州ノ住士勅解
由左衛門忠正カ嫡子ニメ天正十八庚寅年以來
武州多摩郡ニ木村二百五十石ヲ領スト云
○勢州松坂ノ城主古田兵部少輔信勝享年四十

七歳ニシテ卒ス其子重恒幼雅ユハ信勝カ弟大
膳重治ニ家督ヲ賜フト云
○狩野右近孝信カ次男尚信生ル其幼名ヲ三位
ト呼ニテ後主馬ト改メ判髮シテ自適舟ト号ス
慶安ニ庚寅年四十
五歳ニシテ卒ス 兄探幽舟ト優劣十キ名盡十
リ

武德編年集成卷ノ五十二終

